新約聖書 ルカによる福音書 8 章 26 節―39 節（新共同訳）

[26]一行は、ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。[27]イエスが
陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。
この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。
[28]イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。「いと高き神の子
イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。」[29]イエスが、汚
れた霊に男から出るように命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に
取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それ
を引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。[30]イエスが、
「名は何というか」とお尋ねになると、「レギオン」と言った。たくさんの悪
霊がこの男に入っていたからである。[31]そして悪霊どもは、底なしの淵へ行け
という命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。

[32]ところで、その辺りの山で、たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。
悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと、イエスはお許しになった。[33]悪霊ども
はその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだ
れ込み、おぼれ死んだ。[34]この出来事を見た豚飼いたちは逃げ出し、町や村に
このことを知らせた。[35]そこで、人々はその出来事を見ようとしてやって来た。
彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、
正気になってイエスの足もとに座っているのを見て、恐ろしくなった。[36]成り
行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に
知らせた。[37]そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行っ
てもらいたいと、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたの
である。そこで、イエスは舟に乗って帰ろうとされた。[38]悪霊どもを追い出し
てもらった人が、お供したいとしきりに願ったが、イエスはこう言ってお帰し
になった。[39]「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことを
ことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてく
ださったことをことごとく町中に言い広めた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「神の子」

本日の福音書には、ガリラヤ湖の向こう岸にあるゲラサ人の住む地方で行われた、イエスの悪霊祓（あくれいばら）いの奇跡が記されています。

ここに記されている「悪霊に取りつかれている男」は衣服を身につけず、家ではなく墓場を住まいとしていました（ルカ 8:27）。服を着ることは、人が社会で暮らしていくための社会性の象徴でもあります。服を着ずに裸で、墓場を住まいとしていたこの男は、一般の人々の生活から隔絶され、人間性を完全に失っていたのです。

人々は、人の力ではどうすることもできない病や状態を「悪霊に取りつかれた」ものだと考えてきました。それだけに、「悪霊に取りつかれた人」に対する非人間的な仕打ちもありました。

何回も悪霊に取りつかれたその男は、人々から鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていましたが、悪霊によって彼はそれを引きちぎっては、荒れ野へと駆り立てられていました。

悪霊に取りつかれ、狂気の状態にあるその男は、「人々から見捨てられた人」「社会から見捨てられた人」でもありました。この人は、暗黒の中に押し込められ、どこにも救いがないような絶望的な状態でした。もはや手の施しようがなく、回復不可能と思われる状態だったのです。

回復とは、元の状態に戻ること、失ったものを取り戻すことです。本日の、イエスの悪霊祓いの話は、そのような「この世から見捨てられた人」の状況が、絶望から希望に転じた回復の話です。

悪霊に取りつかれた男は、イエスを見て、ひれ伏し、大声で叫びました。イエスに向かって「いと高き神の子イエス」と言ったのです（ルカ 8:28）。この叫びは、この男からのものではなく、この男に取りついている悪霊によるものです。悪霊は、イエスが神の子であると知り、また恐れています。つまり悪霊は、イエスについて、神について、一般の人間以上によく知っているのです。

さらに悪霊は、イエスに向かって「かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」と懇願します（ルカ 8:28）。その人から出ていけ、と命じたイエスの言葉は、悪霊を苦しめたからです（ルカ 8:29）。イエスが悪霊に名を尋ねると「レギオン」と答えました（ルカ 8:30）。レギオンとは、ローマ軍の六千人の軍隊の呼称です。これはこの男が、単独ではなく多くの悪霊につかれていたことを表しています。

悪霊祓いにおいて、相手の名前を知ることは、優位に立つことを意味しました。ここで悪霊たちがイエスに自分の名を告白していることは、すでに悪霊たちがイエスに屈服していたことを示しているのでしょう。

つながれていた鎖や足枷を引きちぎることができるほどの力をもっていた悪霊たちも、キリストの光と力の前には、全く無力だったのです。

悪霊たちは、底なしの淵（黙 9:1）に落とされないように、人間の中から豚の中へと移ることをイエスに願い、許されました。悪霊がその男から出て豚の中に入ると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んでしまいました（ルカ 8:33）。

イエスから悪霊を追い出してもらった男が、服を着て正気になりイエスの足もとに座っているのを見た人々は、恐ろしくなりました（ルカ 8:35）。その人が救われたことを喜ぶよりも、恐ろしさの方が先に立ったのです。

これは人間が、聖なる圧倒的な存在を前にした時の反応の一つだと言えるでしょう。人は、聖なる圧倒的な存在を前にしたとき、これまでの自分のあり方か

らの全面的な転換を求められます。ゆえに、それまでの自分自身が壊されることへの不安と恐れを、本能的に感じるのです。

問題は、自己のあり方が全面的に転換されるときの不安と恐れを、どのように乗り越えて行くことができるかです。イエスにここから出て行ってもらいたいと願ったゲラサ地方の人々の否定的な反応は、恐れからくるものです（ルカ 8:37）。

そして、イエスによって人間性を回復され、イエスの足もとに座っていた悪霊に取りつかれていた人は、それらの人々とは対照的でした。彼は、その出来事に喜びと感謝を表して、イエスに「お供したいとしきりに願った」のです（ルカ 8:38）。

ところが、イエスは彼の願いを聞き入れるのでなく、「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」と言って、その人をその地方に留めました。イエスはこの出来事を「神があなたになさったこと」だと言いました（ルカ 8:39）。

つまり、回復不可能だと思われていたこの人が、回復の道を歩むことができるようになったことが、全面的に「神がなさったこと」であるとここで示されています。人間の回復は、まさに「神がなさったこと」なのです。

マタイ福音書 5 章 16 節にこうあります。「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」。その人は、そこに留まり、キリストの光を、そして神の救いの証人としての光を、その土地で輝かせる必要があったのです。

ヨハネの黙示録にこういう言葉があります。「あなたが生きているとは名ばかりで、実は死んでいる」（黙 3:1）。この言葉は、肉体は生きていても心は死んでいることを意味していると思います。悪霊に取りつかれていたこの男は、イエス・キリストによって再び生きることができたのです。

多かれ少なかれ、人間は皆、このことに共感できる部分があるのではないでしょうか。辛いことや苦しいことがあったり、自分の人生は失敗だったと嘆き「もう死にたい」と思っても、心の奥底では、私たち人間は「生きたい」と願っているのだと思います。

そして、この「生きたい」とは、ただ肉体が生きていることではなく、「真実に生きたい」「神の光の中に生きたい」ということではないでしょうか。

「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」とイエスは言いました（マタイ 5:16）。私たちは、主イエス・キリストの御言葉を覚え、希望と喜びをもって共に生きていきましょう。

お祈りをいたします。
天の父なる神様。あなたの御子は光として世に来られます。あなたの光に私たちが自らを開き、与えられた生を生き抜いていくことができますように。御子イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 65 章 1 節―9 節（新共同訳）

[1] わたしに尋ねようとしない者にも／わたしは、尋ね出される者となり／わたしを求めようとしない者にも／見いだされる者となった。わたしの名を呼ばない民にも／わたしはここにいる、ここにいると言った。[2] 反逆の民、思いのままに良くない道を歩く民に／絶えることなく手を差し伸べてきた。[3] この民は常にわたしを怒らせ、わたしに逆らう。園でいけにえをささげ、屋根の上で香をたき／[4] 墓場に座り、隠れた所で夜を過ごし／豚の肉を食べ、汚れた肉の汁を器に入れながら [5]「遠ざかっているがよい、わたしに近づくな／わたしはお前にとってあまりに清い」と言う。
これらの者は、わたしに怒りの煙を吐かせ／絶えることなく火を燃え上がらせる。[6] 見よ、わたしの前にそれは書き記されている。わたしは黙すことなく、必ず報いる。彼らのふところに報いる。[7] 彼らの悪も先祖の悪も共に、と主は言われる。彼らは山の上で香をたき／丘の上でわたしを嘲った。わたしは、初めから彼らがしてきた業を量り／そのふところに報いる。
[8] 主はこう言われる。ぶどうの房に汁があれば、それを損なうな／そこには祝福があるから、と人は言う。わたしはわが僕らのために／すべてを損なうことはしない。[9] ヤコブから子孫を／ユダからわたしの山々を継ぐ者を引き出そう。わたしの選んだ者らがそれを継ぎ／わたしの僕らがそこに住むであろう。

新約聖書 ガラテヤの信徒への手紙 3 章 23 節―29 節（新共同訳）

[23] 信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。[24] こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。[25] しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。
[26] あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。[27] 洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。[28] そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。[29] あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

教会讃美歌　190 番「主のみ名によりて」、238 番「いのちのかて」、250「つくられしものよ」、199 番「主よいま去りゆく」。